千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第16号　51～56（2020）
研究ノート

千葉県内私立幼稚園の昭和初期の保育内容

中島　千恵子・鍜治　礼子（日出学園幼稚園園長）・浅川　繭子

Education contents in Kindergarten related Some of Private schools in Chiba at beginning Showa.

Chieko NAKAJIMA・Reiko KAJI・Mayuko ASAKAWA

Abstract

Two private Kindergartens in Chiba are researched about education contents at beginning Showa Era. Narita Kindergarten established in 1905 stand at large site, have rich nature and facility. It became famous for good environment. Teachers educate by variable nature contents for children. Another one Hinode Kindergarten established in 1934, Teacher Tsuchiya Masa read their education by nature similar with Narita Kindergarten. But their contents focused some flowers or grasses or small creatures, and to take care them. It was emphasized that is related with teacher's mind to educate children and to care small creatures.

Key-words

education contents at beginning Showa Era , private Kindergartens in Chiba

問題意識

幼児教育は、小学校以上の教育とは違って教科書のない教育であり、現在大綱化された幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領などはあるものの、保育の内容については具体的に何を、いつ、どのように取り上げていくのか、現場の保育者の裁量に任されている。乳児や幼児の発達段階では、まだ個人差が大きく、一律に月齢や年齢等を基準にした保育内容が決められないからである。その分、保育者の役割は大きく重要となる。保育者養成の段階においては、そのことを十分踏まえて養成に当たることが求められる。

保育内容の選択にあたり、子どもにとってどのような保育内容（＝経験）が大切なのか、保育者の判断の助けになる基準として、「発達に合った活動、発達を促す活動」「季節ならではの活動」「地域ならではの活動」「年中行事や伝統行事に関する活動」などがある。これらの視点に加え、歴史的に長く取り上げられてきた活動を知ることは、現場の保育者が子どもにふさわしい保育内容を構成するために役立つと考えられる。長く取り上げられ、実践されてきた内容には、それなりの良さがあり、効果も見られると思われるからである。このような観点から、私達は、明治９年に日本で幼稚園教育が始まって以降の保育内容に焦点を当てて研究してきた。また、この千葉県の中では、明治11年より千葉県女子師範学校において教員養成が始まったものの、保育内容については小学校教員中心の養成の中では教授されず、卒業後に保育現場において実際の保育を学んでいたこと（中島・鍜治、2015年）[1]、千葉県内で歴史のある千葉女子師範学校附属幼稚園においては、東京女子師範学校出身の保育者がいて、保育内容にはその影響が強かったこともうかがうことができた（同上）。

2016年の本学研究紀要においては、その千葉女子師範学校附属幼稚園における大正末期から昭和初期の保育内容を取り上げた（中島・鍜治、2016年）[2]。千葉女子師

範学校附属幼稚園は、戦後、千葉大学教育学部附属幼稚園となっているが、戦前の資料は戦災で焼失しており、原本に当たることはできない。そのため、千葉県の教育雑誌などの関連書物の記述から保育内容を調べることにした。それによると、大正14年発行の「千葉教育１月号」では、一斉のお集まり、歌唱やそれに合わせた遊戯が見られたこと、昭和２年発行の「幼児の教育」では、自由遊びの中の「幼稚園ごっこ」、「汽車ごっこ」、「戦争ごっこ」、お砂遊び、ままごとが報告されていた。

また、昭和６年発行の「幼児の教育」２月号では、保姆達が定期的に上演していた人形芝居が取り上げられていた。人形芝居は、幼児が見るだけではなく、幼児自身の遊びの中に再現され、遊びが発展していく良さがあると述べられている。人形芝居の脚本は、東京女子高等師範学校附属幼稚園で作成したものが利用されていたということも記されていた。さらに、昭和７年「幼児の教育」３月号では、自由遊びの中で買い物ごっこ、お店屋さんごっこのような遊びがあったこと、野球、製作、運動会、虫取り、木の葉拾いなどの記述も見られた。11月号では様々な製作が紹介され、ミニチュア作りや粘土細工、毛糸での手芸などに言及されている。

本研究では、同じ千葉県内であっても、独自の教育方針を持つ私立幼稚園の保育内容はどのようなものであったのかに着目して県内の２つの幼稚園を取り上げることにした。一つは、千葉県の私立幼稚園としては最も歴史のある成田幼稚園、もう一つは昭和９年に設立された日出学園幼稚園である。この２つの園の昭和初期ごろの保育内容を比較して論じていく。

なお、昭和初期頃の保育内容に注目する理由としては、戦後は昭和23年の保育要領、昭和31年からの幼稚園教育要領が示されたことによって保育内容の大枠が文部省から提示され、全国的に多くの幼稚園の保育内容に一定の共通項ができて現在に至っていることから、それ以前の実際の保育内容を明らかにする意義があること、また、戦中は本来の幼児教育が難しく保育内容について他の年代と同じように論ずることができないこと、これらを勘案して昭和初期頃に焦点を当てることにした。

成田幼稚園

千葉県の北部にある成田幼稚園は、明治38年創立、現在まで続いている千葉県内の私立幼稚園としては最も歴史のある幼稚園である。当時の成田山貫主石川照勤僧正が有志と共に設立した。設立直後から、入園児数の増加に合わせて園舎や園庭を整備し、明治の末頃には既に環境設備の整った幼稚園として名前が挙げられていた。

> 成田山新勝寺の五大事業の一として成田山の経営に属して居る。創立は明治三十八年五月にして保育を開始したのはその二十四日である。仮に園舎を成田尋常小学校の一隅を充用したが、幼児入園の申込増加せるを以て、この年十月園舎の新築に着手し、翌三十九年六月を以て、落成した。位置は成田町小字向臺の地を卜し二千八百有余の広潤なる地面を得て眺望絶佳四時の風光に富んでいる。園舎は園長室、保姆室、開遊室を包有する建坪八十八坪の本舎と別に三十六坪余の建物を附属し遊戯室は建坪四十八坪外に応接室、宿直室、玩具室等を具え通計七十二坪を算し、其の他建坪二十九坪余の附属住宅二棟を有す（「千葉県教育史巻４」[3] 初版発行昭和13年千葉県教育會、再発行1979年、青史社、P149）。※下線は筆者による

また、昭和初期頃の様子の報告にも教育の充実が報告されている。

> 私立成田幼稚園の如きは園舎の設備よく整い内容充実している。敷地は高台形勝の地を占め、保育、衛生上最も良好である。保育の方法に至りては改善の余地少からざれども、概ね適切にして小学校教育の資すること多きを見る（「千葉県教育史巻４」初版発行昭和13年千葉県教育會、再発行1979年、青史社、P643）。
> 内外の設備充実し、内容もよく整頓したる同園は、園児も県内幼稚園中最も多く、保姆も三人の外に見習保姆二名ありて保育に従事している（同上、P649）。

昭和初期頃に至って、設備や内容が充実し、県内における幼稚園教育の見本のような園であったことがうかがえる。

保育内容については、次のような記述がある。

> 幼児の保育に就ては最も衛生に注意し、幼児をして知らず知らずの内に衛生的良習慣を養う目的より登園の際は

必ずハタキにて途中の塵を払うを第一とし、携帯品の整理の後消毒水にて手を清めたる後幼児相互の遊びを開始することに定め食事の前後に於ける手洗い口漱ぎ等より幼児の最も頻繁取扱になる積木玩具の如きも強烈なる日光に照したる後にこれを使用す。ボールドの如きも成るべく室内のものを避け庭園用の小黒板を芝生の庭に備え付け清き外気に触れつつ自然を友として描かしむる場合を多くする。又各所に洗面所手洗場を設け、室内にても衛生に注意し日常くりかえす習慣を作り一面衛生的に導くことに留意せる為幼児は最早行い易き習慣となりて実行して居る（「千葉県教育史巻５」[4] 初版発行昭和16年千葉県教育會、再発行1979年青史社、P140）。※下線は筆者による

衛生的な生活習慣を重点に指導されていたことが分かるとともに、積木や玩具の使用頻度が高かったこと、庭園に備え付けの黒板に自然物を描く活動をしていたことが分かった。描画については、以下のような記載もある。

大正十二年までは、幼児が絵を描く時には大体石盤を用いており、画紙の使用は時々行う程であったが、同年十一月二十日を期して、石版に絵を描くことをやめ、全面的に画紙を使用することとなり、クレヨンの箱には、幼児の名前を記入し、取扱いを丁寧にする習慣を作るようにしたのである。今日では絵は画紙に描くものと信じて疑わないけれども、その成田幼稚園での開始は、大正十二年十一月～であった（「創立七十周年記念成田幼稚園史」[5] 昭和50年６月、成田幼稚園、P118）。※下線は筆者による

昭和の初期は、描画にあたって、石盤から画用紙に移行していたということである。この成田幼稚園史には、過去の「学事年報報告」から引用されて保育の状況が紹介されているが、昭和５年のものとして、以下のように取り上げられている。

庭園弐千八百余坪は、年経たる緑の盛りに包まれ、高燥の地域のため空気殊の外清く、庭園は全部芝生にして種々の雑草密生し、タンポポスミレ其他美しき花は、幼児の採るに任せ、また年長者のために畑を作り、年々年長者の手に依りて、落花生甘薯等を栽培し、各幼児の観察の資料とし、蝶蜻蛉其他数多い虫類鳥類の園内を飛び舞う様は、大自然の教えを受けて之を観察し、或いは画題ともなりて楽しき遊びにと導かる。又園内の所々に最近具え付けた運動具・シーソー・滑り台・ブランコ・誘動円木・活動馬等其数弐拾個もありて、幼児運動を愉快ならしむ、かくて幼児は大自然の中に益々健康と元気に保育さる（P165）。※下線は筆者による

また、昭和７年の学事年報報告からの引用では、以下のように取り上げられている。

当園は樹木の繁茂せるため、私の落ち葉は山をなし、幼児用熊手を備え付け、幼児の庭遊び共に、幼児は非常な喜びを以て庭の落ち葉を掻き集め、園内落葉の整頓は職員補助の下に、多数幼児の手に依り整理され、体育上美しき作業として此の遊びを喜ぶ又移動式運動具数多く備え、幼児の遊びに供し、又花壇のお掃除草花の水やり、鬼ごっこ遊び等、広い庭園は悉く幼児の良き運動場であり、又良き時を選び成田公園に引率し、遊びの裡に体力の増進を図る（P166）。※下線は筆者による

豊かな自然環境の中で、落ち葉集めや花壇の手入れ、鬼ごっこ遊び、様々な運動遊具での遊びがなされていたことが示されていた。

成田幼稚園の自然環境を生かした保育は特徴があり、小山（2012年）によっても論じられている。小山は、成田幼稚園の保姆達が他園との研究交流や熱心な学びを進めて自然保育を展開していたことを指摘している（小山みづえ「近代日本幼稚園教育実践史の研究」[6] 2012年、P158）。成田幼稚園は広大な敷地、自然豊かな立地を生かした自然保育を研究の裏付けをもって展開していたことがうかがえる。

日出学園幼稚園

日出学園幼稚園は、昭和９年に市川市菅野において、実業家青木要吉と地元有志によって設立された。日出学園の幼稚園と小学校は同年に設立され、戦後に日出学園中学校、日出学園高等学校が順次開設された。設立のきっかけは、地元有志の会（「御代の会」という親睦の会）にて青木要吉が「市川町には市川小学校しかなく児童が溢れているそうだから、昔の寺子屋のような少数主義の独特の小学校を作っては」と提案したことから始まった

ということである。

幼稚園開設時より、２名の保姆、土屋まさ（真砂子）と五十嵐操が勤務し保育にあたった。日出学園幼稚園について、戦前の古い資料はほとんど残っておらず、現存するのは昭和40年代からである。今回、保育内容を調べるにあたっては、周年記念誌の記載や対談などで語られたことをもとにしている。

土屋は、千葉女子師範学校を大正14年に卒業すると同時に幕張小学校訓導として勤務し、千葉県女子師範学校附属幼稚園の保姆も兼ねていたという。日出学園幼稚園には亡くなる昭和37年まで勤務し、「日出学園幼稚園といえば土屋先生」と言われるような教員であり、戦後は文部省の保育要領改訂委員にも加わるなど活躍していた。昭和37年発行の「土屋先生の思い出」(7) には最初に勤めた幼稚園について以下のように記載されている

> この幼稚園は県下で最初のもので、母校の幼稚園教育に対する試金石ともいうべきものであって、設備その他極めて原始的なもので、先生の創意工夫を要することが多かったようである（P2）。

また、同じく「土屋先生の思い出」に掲載されている当時の文京区立第一幼稚園園長山村きよの手記によると、

> 大正十四年四月、千葉県の幕張小学校に始めて赴任した新卒の私とあなた、お互に新鮮な気持ちで、はりきって二年生の教壇に立った二人は午后幼稚園の先生に早がわり、あなたに始めての幼稚園生活、私には始めての農村生活と農村の子どもたち、どっちも真剣でしたね。（中略）あれからもう三十七年、お互いによろこびやかなしみにも出会った人生でしたけど・・・・・・・・・今でもやっぱりずうっと幼稚園の先生で通した二人、ことにあなたは幼稚園界に沢山のお仕事を実らせ、自然の領域では、なくてはならない先生になられて、（P56-57）

とあり、千葉県の最初の幼稚園において２人で苦労して保育を実践していたことがうかがえる。また、土屋の保育実践の成果を表すものとして「自然」という領域に言及している。この「土屋先生の思い出」という追悼文集では、多くの人が、土屋が大変よく花壇や草花の手入れをしていたこと、小鳥やアヒルなどの世話をしていたことなどに言及している。長年の実践で土屋が自然領域の保育に精通していたことから、晩年の昭和36年には文部省より初等教育実験校の指定を受け、「『自然』の領域における５歳児の望ましい経験」をテーマに研究を進めた。土屋は、自然を保育に生かす気持ちを強くもって日出学園幼稚園の保育を主導してきたのである。

土屋本人の手による資料が少ないが、「土屋先生の思い出」の中に、昭和37年４月18日真間山幼稚園での土屋の講演を起こしたものが掲載されている。そこに、土屋と自然とのかかわりについて本人の言及がある。

> 私が『自然』を保育の中で格別に愛好し重要視するようになったそのきっかけを申し上げますと、一つは田舎に育ちましたものですから、私は母の後を追って山に行き、それから田んぼに行き、畑に行くという生活をしていたわけでございます。（中略）本当に自然を友としての遊びというもので過ごして育って来たわけでございます。今の幼稚園の子供を自然の中にほっておいてみますと、やはり私が楽しんだと同じような遊びを喜んで楽しんでいる事を見うけまして、やっぱり子供の本能と申しますか、その発達段階に於て幼児の間にはそういう原始的な遊びというものが本当に子供にふさわしいものではなかろうか、私共が経験したと同じように子供があの喜ぶ原始的な自然の野辺の遊びというものを満喫させてあげるということが、この幼児の時代に大切ではなかろうかということを考えたのでございます（P23）。　※下線は筆者による

というように、もともと自然を愛好していたこと、その上で保育に力を入れるようになったことが述べられている。さらに、

> そして花を育てる、動物をかう、小さな虫をかうという私達の細やかな気持ち、それが幼児の保育をするという細やかさに通じて行くものではないか、（P25）

と、教育環境としての教員の在り方として、草花や生き物を大切に扱うことが重要であると述べている。日出学園五十年史 (8) には、当時職員だった武田百代による手記が掲載されているが、その中で、

> 「（土屋先生は）幼稚園教育の中で、「自然」を特に重要視され、幼児の時に自然の遊びを満喫させることの大切さを考えたのです。（中略）四季の花いっぱいの園庭

の自然環境づくりをめざして努力されました。（中略）自然にふれる園外保育も歩け歩けのよい時代でした。」（P56-57）

とされている。「日出学園幼稚園といえば土屋先生、土屋先生といえば自然」といわれるほどであったことが伝わってくる。

日出学園五十年史には、実際に保育を受けた者による座談会も掲載されていて、昭和９年から昭和16年頃までの保育について語られている。その内容を抜粋する。

《運動会》「運動場はまだ狭かった」「６角形の鳥小屋があって、池もありまして」「狭いので、運動会は隣の国府台女子学校でおこなった」（P47）
《朝礼》「月１回か忘れましたが、朝礼のようなのをして、よくお話をしてくださいました」（P48）
《お遊戯》「お遊戯なども、『火砲のひびき遠ざかる』とか『兵隊さんがいくさのけいこ』などというのでした。慰問袋に入れる絵なども書かされて」（P50）
《お墓参り》亡くなった理事長のお墓参りに、市川から八柱霊園まで「よく歩いていったと思いますよ。」（P51）
《ひらがな》「もうすぐ１年生という頃に、画用紙で、あいうえお、かきくけこの練習をしたことがありました」（P52）
《歌》「桜井の別れの歌劇をやりましたね、私が正成でね。今でも、歌えますよ」（P53）

上記のほかにも、学芸会やお節句、式なども小学校と一緒に行ったという記述もあった（P51）。また、隣の国府台女学校についてもよく言及されており、「花祭りの時は、国府台女学校に行きましたね」「あと、地久節の時ね。」（P53）、「お式は、ほとんど、国府台女学院に行ったの」「あの頃は、国府台とずい分交流がありましたね。今はもうないのでしょうね。こちらにも、高校ができましたからね。」（P53）など、日出学園小学校とも、隣の国府台女学校とも家族的といえるかかわりがあったことが分かる。この対談では、自然とのかかわりについては特別話題に上っていないようで、それも逆に興味深い。

まとめ

本研究では、千葉県内の歴史のある幼稚園を２つ取り上げ、昭和初期頃の保育内容を見てきた。成田幼稚園は、広大な敷地と自然豊かな立地を生かした自然保育が特徴で、自然に触れ、皆で作業をしながら衛生面を伸ばし、自然観察をし、遊びながら体力も増進する、という保育であったことがわかった。また、日出学園幼稚園では、昭和９年の設立当時からの保姆土屋まさが保育を主導し、園庭に草花を育てて自然環境を構成し、子どもが自然とふれあって遊ぶ本来の楽しみを大切にすること、保育者が草花を育てる細やかな気持ちをもって保育にあたることを重視していたことが分かった。どちらも自然保育ということは共通しているが、内容には大きな違いがある。

これまで私達が調べてきた千葉女子師範学校附属幼稚園では、同じ時代であってもごっこ遊びや製作などを工夫して保育することに力が注がれていた。今回、２つの私立幼稚園を調べてみると、重視する保育内容の方向性の違いが見られ、それがそれぞれの幼稚園の個性となっていたように思う。それには、それぞれの幼稚園の立地も関係しているであろう。

引用文献

(1) 中島千恵子・鍜治礼子　「千葉女子師範の保育者養成と保育内容」千葉経済大学短期大学部研究紀要第11号　pp.77-82　2015年
(2) 中島千恵子・鍜治礼子　「千葉大附幼における大正末期から昭和初期の保育内容」　千葉経済大学短期大学部研究紀要第12号　pp.37-44　2016年
(3) 千葉県教育会　『千葉県教育史』　巻４（初版発行昭和13年）　青史社p.149, 643, 649　1979年
(4) 千葉県教育会　『千葉県教育史』　巻５（初版発行昭和16年）　青史社　p.140　1979年
(5) 成田幼稚園　『創立七十周年記念成田幼稚園史』　pp.118-166　昭和50年（1975）
(6) 小山みづえ　『近代日本幼稚園教育実践史の研究』　学術出版社　p.157　2012年

(7) 小柳篤二 『土屋先生の思い出』　土屋先生記念会
1962年
(8) 日出学園五十年誌編纂委員会 『日出学園五十年史』　学
校法人日出学園 pp.47-57 1984年

参考文献

日出学園創立75周年誌編集委員会　『日出学園創立75周年誌』
学校法人日出学園　2009年